

『軽井沢トークサロン』特集にあたって

編集事務局

日本オーディオ協会では去る8月16日～24日に軽井沢の癒しの森林の中にあるホテル「万平ホテル」の「ザ・ハッピーヴァレイ」で、軽井沢八月祭に協賛した第2回目の「軽井沢オーディオサロン」を開催し、多くの音楽愛好家とオーディオファンをお迎えしました。

ゆったりとした会場でお客様に思い思いにお座りいただき、極上のオーディオシステムによるディスク再生音楽会を堪能いただきました。



「軽井沢オーディオサロン」会場入口

会場にはアキュフェーズ株式会社、ステラヴォックス ジャパン株式会社、ソニー株式会社、パイオニア株式会社、ハーマン インターナショナル株式会社、フォスター電機株式会社フォステクスカンパニー、株式会社 TAD ラボのオーディオ機器が設置され、『いつでも、お好みの演奏が、繰り返し楽しめる』ディスク再生音楽の醍醐味を味わっていただきました。



会場の前方に置かれた再生システム

各社のオーディオ機器による再生演奏会に加えて連日のスペシャルイベントとして、音楽制作現場で活躍するプロをゲストに迎えた『トークサロン』が行われました。



『トークサロン』会場風景

本特集号では、『トークサロン』の講師として御参加いただいた方々から、当日お話しいただいた音質を追求した作品の紹介や、これから手がけられる作品の紹介などの原稿をいただきました。

再生音をお聴かせできないのが残念ですが、皆様心がこめて制作されている作品を誌面にてお楽しみください。

なお、各講師のセッションではセッションごとに次のスピーカーを用いて作品を再生しました。

8月16日 松山講師：JBL、TAD

8月17日 松田講師：FOSTEX、JBL

8月18～22日 船木講師：JBL、TAD、

GERMAN PHYSIKS、

FOSTEX、VIVID AUDIO

8月23日 小川/杉本講師：VIVID AUDIO、TAD

8月24日 斉藤講師：FOSTEX、JBL

SHM-CD クラシック盤について

ユニバーサル ミュージック (株)

松山 明人

1. SHM-CD とは

私どもと日本ビクターさんとで共同開発した新しい素材による SHM-CD をご紹介します。

SHM-CD というのは、従来の CD 素材とは別の、液晶パネル用のポリカーボネートを使用しプレスしたものです。

昨年の 10 月から発売を行って来ましたが、当初、クラシックとジャズだけでの発売だったのですが、おかげさまで大好評をいただき、今ではロック、ポップスや J-ポップ、さらには他メーカーさんのレパートリーも、この SHM-CD で販売するようになり、さらに広がっています。

この SHM-CD の特長を簡単に言うと、素材の透明性が格段に向上したことにより、マスター・テープの音に限りなく近い音質を再生できるということにつきます。



松山 明人さん

2. カラヤンの作品から

まず、オーケストラ・サウンドの繊細な響きをお聴かせします。

用意したのは、カラヤン指揮 / ベルリン・フィルによる 1972 年の録音、リヒャルト・シュトラウスの《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快な悪戯》

です。ドイツ・グラモフォンのおなじみの、ハイビット・リマスタリングされたオリジナル音源によります。

冒頭の弦と木管のやりとり、ふくよかなホルンの音色、そしてティンパニの切れ味等、この曲の聴きどころが、SHM-CD でさらにその魅力を増しているのではないのでしょうか。

まずは通常の CD 盤から、次に SHM-CD 盤をお聴き下さい。なお、今回、各曲とも同じ条件で聴き比べを行うため、同じプレーヤーで聴き、レベルも同一にしますので、CD の交換に時間がかかったり、曲の途中で途切れたりする点はご了承下さい。



CD : UCCG-3315

SHM-CD : UCCG-9782

(ユニバーサル ミュージック)

R.シュトラウス：交響詩《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》作品 28 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
指揮：ヘルベルト・フォン・カラヤン

ところで、カラヤンという指揮者ですが、今年は彼の生誕 100 年にあたる記念年ということで、彼の未発表の CD、映像や、彼の膨大な録音が数多く発売されています。

当社でも彼のドイツ・グラモフォンにおける全レコーディングを年代順に収録した CD 240 枚組という、空前のものを企画、発売しました。

私は彼の最晩年、1988 年、最後の来日公演で彼の姿を間近に見ましたが、身長は、かなり小さかったと記憶しております。公表では 163 センチ、西洋人としてはかなり小さい方ですが、実際はもっと小さい印象を受けました。

指揮台に向かう時も、オーケストラの中を歩くのも彼ならではの。若い頃はそうではなかったのですが、足取りを見せなくなかったのだと思います。しかし、指揮台にあがると別人、あっとい間にあの、我々が知っている格好いいカラヤンになるのです！

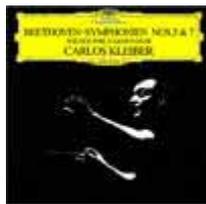
カラヤンは新しいメディアに異常なほど興味を示した人でした。ステレオ録音、デジタル録音、映像、と、その時々登場する新しい録音方式、メディアに興味を示し、それを最大限に活用しました。彼が生きていたら、このSHM-CDにも興味を示したに違いありません。

3. クライバーの作品から

もう一人、亡くなった巨匠指揮者の演奏をお聴き下さい。2004年に74歳で亡くなったカルロス・クライバーです。彼の名前を有名にしたのが、1976年、46歳でデビュー録音となったウィーン・フィルとのベートーヴェンの交響曲でした。

ここでは彼の十八番とも言うべき第7番の第4楽章をお聴き下さい。一昨年ブームとなった『のだめカンタービレ』というドラマの影響で、今最も人気の高い交響曲です。これは1995年にリマスターされた音源からです。

SHM-CD盤では、冒頭のトゥッティの輝かしい響き、主旋律を奏でるヴァイオリンの躍動感、ホルンの咆哮、全てが通常盤に比べ、より生き生きと鳴り響き、クライバーの華麗な指揮ぶりが目に浮かぶようです。そして、よりふくよかとなった音像は、やはりオーケストラが他でもないウィーン・フィルであるということを再認識させてくれます。



CD : UCCG-2001

SHM-CD : UCCG-9701

(ユニバーサル ミュージック)

ベートーヴェン：交響曲 第7番 イ長調 作品92

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、指揮：カルロス・クライバー

ところで、彼のお父さんもエーリヒ・クライバーというドイツの名指揮者でしたが、第2次世界大戦中にナチと衝突し南米に渡ったため、幼いカルロスもしばらくアルゼンチンで暮らしていました。彼にラテンの血は全く入ってはいないのですが、よっぽど南米での生活が気に入ったのか、最後までカルロスというラテン系の名を使っていました。

さて、カルロスがやはり指揮者を志し、ヨーロッパの歌劇場に登場することになったのですが、当初、彼はお父さんの七光りを嫌い、わざとカール・クラーという名を名乗っていたそうです。お父さんもお父さんで、息子のヨーロッパでの活動の手助けをする一方、公の場で息子の音楽を手厳しく批判したそうです。お互一流の芸術家ということで、われわれ凡人には計り知れない複雑な関係だったようです。

でも、息子は立派に成長し、その名声はお父さんを上回るほどだったのですが、度重なるキャンセルやオーケストラとの衝突で...でも逆にそれが伝説となって、彼の登場するチケットはプレミアが付いて、でも当日キャンセルになる、といったようなことが続きました。

1983年、ウィーン・フィルとベートーヴェンの交響曲を録音することになりましたが、ウィーン・フィルと大喧嘩してしまい、それ以後10年以上もウィーン・フィルを振ることはなかったのです。当時、デッカのスタッフから、《田園》の第2楽章までは録音が終わっている、と聞いていましたが、とうとうそれが完結することはありませんでした。

僕も、オペラとコンサートそれぞれ一度ずつ彼の演奏を生で聴きましたが、演奏よりも、華麗な指揮姿の方が印象に残っています。

4. ポリーニの作品から

次はピアノを聴きましょう。今なお世界最高のピアニストとして君臨しているポリーニが1972年に録音したショパンの練習曲集、録音から30年以上たった今でもその切れ味のあるテクニック、録音は色褪せません。曲は《革命》と呼ばれる曲です。

SHM-CD で聴くと、より残響が美しく感じられるから不思議です。冒頭の八短調の強打和音の瑞々しさ、それに続く下降旋律の濁りのなさ、強音と弱音のコントラスト! 全て残響が絶妙の効果を発揮しています。

LP 発売以来 35 年、何度もこの名盤を聴いてきましたが、正直、こんなに残響の多い録音とは思いませんでした。CD 盤につづいて SHM-CD 盤をお聴きいただきます。



CD : UCCG-2002

SHM-CD : UCCG-9714

(ユニバーサル ミュージック)

ショパン : 12 の練習曲 作品 10、第 12 番八短調《革命》

マウリツィオ・ポリーニ(ピアノ)

このポリーニというピアニスト。なかなかやっかいな人で、録音はコンスタントにするのですが、なかなか発売に至らない。つまり O.K.を出さないのです。なかなか出さないのですが、決まるとすぐに出さなければいけない、という本当に我がまを絵にかいたような人です。

日本に来て、大体ホテルにずっといるのですが、普段なかなか取材には応じてくれないのに、突然、電話が掛かって来て、「今、時間が空いたから、テレビのインタビューでも受けるから呼んでくれ」です。それでも演奏は素晴らしいのです。

5. ホリガーとイ・ムジチ合奏団

次はフィリップス・レーベルです。こちらは 1986 年のデジタル録音。オーボエの第一人者、ホリガーとイ・ムジチ合奏団によるパロックの名曲、マルチェロのオーボエ協奏曲です。

ここでは何より、チェンバロの音に注目して下さい。SHM-CD ではそのチェンバロと低弦、いわゆる通奏低音が見事なまでに存在感を増し、まさにパ

ロックの世界、雰囲気をかもし出しています。オーボエのより臨場感のある音も魅力です。



CD : PHCP-21012

SHM-CD : UCCP-9714

(ユニバーサル ミュージック)

マルチェロ:オーボエ協奏曲 二短調《ベニスの愛》

ハインツ・ホリガー(オーボエ)、イ・ムジチ合奏団

ところで、チェンバロという楽器は非常に録音泣かせの楽器です。まず、音量がピアノに比べて非常に小さいこと、さらに基本的に強弱がないこと、そして最大の難関が演奏ノイズが多いこと(鍵盤を引っかく音)、などです。音量が小さいのにノイズが多いわけですから、これを鑑賞用の心地よいサウンドに仕上げるのは至難の業です。

コンサート・ホールではそれ以外のノイズもあり、演奏している姿を見ながらなので、気にならないのですが、レコードではそうはいきません。私もチェンバロを含むオーケストラの録音に立ち会ったことがあります。このときは録音エンジニアが大活躍なのです! チェンバロが入った作品の CD をお聴きになった際は、是非、エンジニアの苦勞を思い浮かべて下さい。



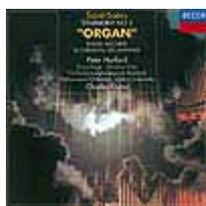
軽井沢オーディオサロン会場風景

前方に再生機器群と講師(右端)

6. サン=サーンスの交響曲《オルガン》

続いては華やかなオーケストラ録音には定評のあるデッカ・レーベルで、デュトワ指揮/モントリオール交響楽団による1982年デジタル録音、サン=サーンス:交響曲第3番《オルガン》です。第2楽章第2部、テレビ・コマーシャルでも馴染みの、オルガンの大音量で始まる部分です。

SHM-CDで聴くと、純度の高いオルガンの響きもさることながら、低弦の充実したサウンド、途中の弦とピアノのからみの部分の透明な響きなどが目を見張るものがあります。



CD : UCCD-5019

SHM-CD : UCCD-9514

(ユニバーサル ミュージック)

サン=サーンス:交響曲第3番《オルガン》

モントリオール交響楽団、指揮:シャルル・デュトワ

ピーター・ハーフォード(オルガン)

この作品を録音する際、大体はオーケストラとオルガンを別々に録音し、後にそれをつなぎ合わせるという方法をとります。まず、コンサート・ホールで、オーケストラだけで録音し、それに合わせ、教会などでオルガン・ソロの録音をし、それらをつなぎあわせるやり方です。すごく不自然に感じられるかも知れませんが、この方が実演よりも迫力のある演奏が聴けるのです。

独奏楽器とオーケストラの作品、いわゆる協奏曲は大体そうなのですが、実演と録音のギャップが一番大きい作品かも知れません。きっと、作曲者のサン=サーンスも(彼は一流のオルガニストでもありましたが)、現在のCDを聴いたら驚くでしょう。

このモントリオール交響楽団の録音は、もともとこのオケが普段からユスターシュ教会という、教会で録音を行っているため、その教会備え付けのオルガンを使用できるので、同じ空間でオケとオルガン

を録音することが出来たのです。同時に録音した珍しい例です。

そもそも、オルガンは倍音が多く、実音がつかみ難い楽器なので、オーケストラと一緒に鳴らすとあまり良い響きにならないのですが、ここもエンジニアの腕の見せ所となります。

7. 三大テノールのライヴから

最後は歌、しかもライヴ録音です。クラシックのメガ・ヒット・アルバムとなり、世界で1,200万枚もの売り上げを記録した1990年の《3大テノール/世紀の競演》からです。

アンコールで3人が歌った「誰も寝てはならぬ」をお聴き下さい。まさに臨場感溢れる録音で、ビデオをご覧になった方はお分かりだと思いますが、最初に歌うドミンゴが身体を動かしながら歌っているところなど、SHM-CDだとさらによくわかります。聴衆の盛り上がりぶりも聴きどころでしょう。



CD : POCL-1481

SHM-CD : UCCD-9511

(ユニバーサル ミュージック)

3大テノール~世紀の競演:ホセ・カレラス、プラシド・ドミンゴ、ルチアーノ・パヴァロッチィ(テノール)、フィレンツェ五月祭管弦楽団/ローマ国立歌劇場管弦楽団、指揮:ズービン・メータ

この3大テノールのアルバムは先ほど申し上げた通り、空前のメガ・ヒットを記録したのですが、このCDを最初に発売した際は、こんなにヒットになるとは思っていませんでした。まず一つに、3大テノールの一人、昨年亡くなったパヴァロッチィという歌手の存在です。当時から世界中で知らぬ人がいない存在だったのですが、日本ではそこまで行っていなかった。オペラ・ファン、クラシック・ファンには馴染みだったのですが、一般の人には知られていませんでした。

それともう一つ、このコンサートは1990年のサッカー・ワールド・カップのローマ大会の決勝前夜のイベントとして行われ、それがヨーロッパ中にテレビ中継されたのですが、当時、日本でのワールド・カップの認識は今とは比べ物にならないほど寂しいものでした。まだJリーグもスタートしていなく、このCDを担当した僕も、ワールド・カップってそんなに凄いものなのか？ という認識でした。

従って、このCDの売り上げも、当初はヨーロッパのどんな国よりも少ない、例えばイギリスの30分の1、スペインの10分の1、ヨーロッパで日本が勝てる国はパチカン市国しかないのではないかと、というほどでした。

でも次第にパヴァロッティの、そしてワールド・カップの認識が高まるにつれて、日本でも売れるようになり、今では立派に日本でもメガ・ヒットを記録した、と言えるほどになりました。

筆者プロフィール

松山 明人 (まつやま あきひと)

ユニバーサルクラシックス&ジャズ 制作編成部 第1グループ主査。

ドイツ・グラモフォン、デッカ、フィリップス等のクラシックレーベルの国内盤CDを制作。

モーツァルト大全集やカラヤン/コンプリート・レコーディング等の独自企画CDも制作。

子供の頃から音楽好き。趣味のピアノを弾く。

(2008年上半期)

オクタヴィア・レコードの話題盤の紹介

(株)オクタヴィア・レコード プロデューサー

松田 善彦

オクタヴィア・レコードでは

オクタヴィア・レコードでは EXTON (オーケストラや弦楽器を中心に) TRITON (ピアノ専門) CRYSTON (管楽器専門) 3つのレーベルでクラシック音楽の製作を行い、ハイクオリティな音楽と録音を日夜追求しています。

我々スタッフの製品作りのモットーの一つとして、音質の「マスタークオリティ」があります。それを製品に反映させる手法として、いくつかの提案を発表し製品化してまいりました。

ここではCDとSACDハイブリッド盤での最近の新譜からいくつかご紹介いたします。



松田 善彦さん

ゴールドディスク仕様 CD

最近のCDアルバムからズヴェーデン指揮、オランダ放送交響楽団演奏のストラヴィンスキーの「春の祭典」と清水和音のピアノ演奏でムソルグスキーの「展覧会の絵」をお聞きいただけます。

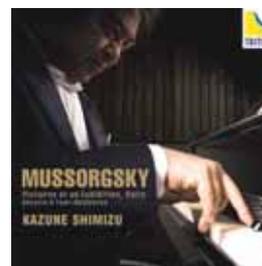
どちらも初版は金蒸着を施したゴールドディスク仕様で発売しています。



EXTON レーベル

OVCL-00312

ストラヴィンスキー バレエ音楽「春の祭典」(1947年版) 他
(指揮)ヤープ・ヴァン・ズヴェーデン
オランダ放送フィルハーモニー管弦楽団



TRITON レーベル

OVCT-00046

ムソルグスキー組曲「展覧会の絵」 他
清水 和音 (ピアノ)

ご承知のとおりCDの音質向上では、過去に盤の素材を通常のポリカーボネイトからAPO、アートン等、最近ではHMCDと色々と試行錯誤されています。一方、盤の反射面の素材でも音質のマスタークオリティの改善がみられます。今回弊社はこのタイトル以外でも金蒸着のアルバムを多数販売いたしますのでご期待ください。

試聴します「春の祭典」におけるしっかりとしたバスドラムの低域からシンバルなど、音色の鮮やかさとダイナミックの変化、ピアノ演奏の豊かな表現

をCDフォーマットでこれだけのクオリティを引き出したのは金蒸着の効果も一つのファクターであると言えます。

SACDの音質向上

SACDの音質向上の試みとして、2つのアイテムを弊社は提案しています。「HQ HYBRID」シリーズと「ダイレクト・カット HYBRID」シリーズです。

通常のハイブリッドCDはSACD層にマルチチャンネルとステレオチャンネルと膨大なデータを掲載しています。カットングマスターを製作するオーサリング時にデータを圧縮しなければなりません。プレーヤーにおける再生時にはデータを解凍しなければなりません。

これらの再生環境の負荷を除去しピュアなデータ再生を目標とした製品がこの2つのシリーズです。非圧縮データのSACD層なので容量の都合上ステレオのみの掲載です。

ダイレクト・カット盤はそのHQシリーズの高品位仕様です。違いは量産化に用いるスタンパーではなく、音質評価時に試聴するバージョン・スタンパーともいえる、テストプレスに使用するスタンパーで製品化したアイテムです。

このスタンパーは高音質を保証しますが量産に限界があり多くても50枚とされています。そのため高価なアイテムとなってしまいますが、マスタークオリティの追求と言うことでは弊社として最高峰のアイテムとして好評を得ております。

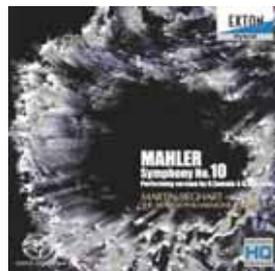
ダイレクト・カット盤の試聴

では最近発売されましたマーラーの交響曲第10番をこのダイレクト・カット盤でお聞きください。

今回お聞かせするのは、未完のこの交響曲を新たに補筆完成させた、定評あるクック版とはちがうサマーレ&マツツーカー版の世界初録音のアルバムです。

クック盤とは一味ちがう、後期マーラーの濃厚なオーケストレーションを緻密に研究し再現した最新

版です。



EXTON レーベル
OVXL-00015

マーラー：交響曲 第10番 嬰へ長調
(サマーレ&マツツーカー共同補筆版)
(指揮) マルティン・ジークハルト
アーネム・フィルハーモニー管弦楽団

2007年12月の録音で、立ち会ったセッション時にもさらに手直しがされています。ではその第2楽章をお聞きください。演奏はマルティン・ジークハルト指揮 オランダのアーネムフィルの演奏です。ダイレクト・カット盤ならではのきめ細かな音楽の表情の変化や会場の空気感をお聞きください。

これからも弊社は新たなマスタークオリティの追求を致して行く所存でありますのでご期待ください。

おわりに

最後に今年2008年はカラヤンとともに朝比奈隆の生誕100周年です。

私は巨匠の最後のベートーヴェンとブルックナーの制作をさせていただきました。すべてライブを基本の制作でしたが巨匠のリハーサルから本番全てを立ち合わせていただいたことは一生忘れない経験と大きな啓示を受けました。朝比奈先生には感謝の念が絶えません。

巨匠だけが成しえる音楽の豊穡の瞬間がどのアルバムにも聞くことができます。その中から堂々とした開始の主和音と悠々たるテンポながら決して停滞はせず、前進し巨大な音楽を築き上げるベートーヴェンの「英雄」の第一楽章を聞いていただき、皆様とともに朝比奈先生を偲びさせていただきます。



EXTON レーベル
OVCL-00026

ベートーヴェン：交響曲 第 3 番 変ホ長調 作品 55 「英雄」
(指揮) 朝比奈 隆
大阪フィルハーモニー交響楽団

筆者プロフィール

松田 善彦 (まつだ よしひこ)

オクタヴィア・レコード プロデューサー兼レコーディング・ディレクター及びエンジニア。

ウイーン国立音楽大学 音響・電子音楽科卒業。

晩年の朝比奈 隆の録音を担当。ブルックナー：交響曲第 8 番は 2002 年度レコードアカデミー賞を受賞。

音楽ファンにスピーカーで聴く音楽の素晴らしさを知ってもらいたい

軽井沢オーディオサロンに参加して

アイオロス・プロデューサー

船木 文宏

はじめに

7月1日から途切れることなく真夏日が続いていた東京から軽井沢に着くと、なるほどここは標高1,000メートルを超える土地です。駅を出ると澄んだ空気がひんやりとして、思わずカバンからジャケットを取り出して着込みました。しかし、この夏の異常は東京だけではありませんでした。軽井沢は例年になく雨が多く、これは散策の道すがら音楽を聴いてみようという来客の気持ちを著しく殺ぐことになり、関係者の心を痛めました。

しかし、森の木々に包まれた万平ホテルの別棟ハッピーヴァレーのロケーションは、音楽を聴くにはこれ以上ないといった環境で、あまり良くない空模様にもかかわらず、熱心な方々が時には会場を満員にすることもしばしばでした。

今年のイベントに参加することが決まって、真っ先に考えたのは客層でした。来客の大半は音楽ファンで、それもクラシック6割、ジャズ3割、その他1割という割合だろうと予想しました。こういうお客さまに、音楽製作者として何をテーマにお話したら喜ばれるのか大いに悩んだすえ、生のコンサートで音楽を楽しむのと同じくらい、オーディオで音楽を聴くことは素晴らしい、しかも装置がよくなると表現力もかなりのものだ、そう思って帰っていただくことを目指しました。

私自身のレーベル「アイオロス (AEOLUS)」を宣伝しても、誰も喜んでくれないはずですから、聴いていただく録音作品も、自社作品は最小限に抑え、過去の名録音から私の愛聴盤を中心に選ぶことにしました。



船木さん

スピーカーで聴くオーディオの楽しみを

デジタル携帯プレーヤーの大普及で、音楽はヘッドフォンで聴くのがほとんど、という若者が多くなっています。しかし、この会場にこられる方には、ぜひスピーカーから音を出して聴くオーディオの楽しみを味わっていただきたいと思いました。

そこで、アップルのスティーヴ・ジョブズ先生には申し訳ないのですが、少々非難も大物なら痛くも痒くもないはず。つい、こんなことを話してしまいました。

「みなさん、iPodの圧縮音声の優秀さは、リニア(非圧縮)と比べてまったく同等で、誰も圧縮とは気づかない、というアップルの親分の殺し文句は、いただけません。

ヘッドフォンによる瞬間的な比較では、間違う人がいても、長時間しっかり聴けば必ず違いはあります。それに第一、iPodは基本的にはヘッドフォンで聴くものですから、現在の圧縮率とクオリティでい

いのですが、さて、家の中でもヘッドフォンで聴くというのは、どうも人間の基本的生理を満足させないのではないのでしょうか。やはり、家ではスピーカーから音を出して聴きたいものです。そうすると、今の圧縮率は少々問題ではないかと思えます。」

このようなことを枕に置きますと、少しは耳を傾けてもらえそうな気がしました。そこから、どうしたらいい音を聴くことができるのか、そもそも、いい音ってなんなんでしょう、というような話題で関心を引き付けておきながら、音楽を聴いてもらうことにしたのです。

オーディオ再生で、音の質にいちばん大きな影響をもつのは、スピーカーです。その点で今回の会場に置かれていたスピーカーは、どれも水準を超える高いクオリティをもっていたので、好都合でした。

もちろん、それらの大型スピーカーをドライブするアンプも内外の超弩級が用意されていましたから、基本的なオーディオ面でのクオリティについては心配がいりません。

第一、中高年で女性が過半を占める音楽ファンには、オーディオ用語はできるだけ減らさなければなりませんから、回路だ素材だはもちろん、解像度、周波数特性、ダイナミックレンジ、SN比だって使わないほうがいいのです。

スピーカーの音に感動しなくては何も始まらない

スピーカーから音を出して聴くオーディオの魅力は、響のいいホールの客席で聴くような音を、家庭で楽しめることです。ただし、力を入れすぎて昔のように「原音再生」などとい出ししたら、失敗です。

私が注意を喚起したのは、スピーカーから楽器や人間の声とまったく同じ音が出るはずがない、ということでした。なぜなら、楽器も人間の声も、それぞれに固有の振動体と共鳴体をもっていて、大きさも千差万別です。それに対してスピーカーは、そのスピーカーがもっている振動板と、与えられたキャ

ピネットだけで、あらゆる音を出さなければならないのです。

ですから、スピーカーから本物の楽器の音や人間の声を出すことは不可能です。しかし、よく出来たスピーカーで聴くと、本物そっくりに聴こえるのです。不思議です。この不思議さに感動しなくては、オーディオは始まりません。

最近では電卓も携帯電話も、ゲーム機も携帯デジタルプレーヤーも、生まれたときから目の前にあって、誰もがそれらを当たり前のように感じています。しかし、オーディオでスピーカーから音を聴くと、同じ振動板から弦楽器も管楽器も打楽器も、あるいは人間の声も、実に本物そっくりに聴こえます。

この不思議さに感動することが、オーディオの出発点だと私は思います。それは、本来は無理なことなので、オーディオでいい音を聴こうとしたら、性能のいい道具が必要だし、それを最適に鳴らすいろいろな工夫が必要だ、ということが、はっきりと分かるからです。

小さな音から大きな音まで、破綻なく再現することの大切さ

スピーカーはいろいろな楽器の音を本物そっくりに再現できるだけでなく、小さな音から大きな音まで、音量のスケールも本物そっくりに再現できます。これができなければ、楽器の音の違いは正確に出せても、音楽の姿や形は再現できません。

そこで、まずもっとも小さな楽器の例として、ギターのソロを聴いていただくことにしました。「鳥の歌」という山下和仁さんのギター小品集です。これはアイオロスの作品ではありませんが、収録会場の「つくばホール」で、録音の一部を聴かせてもらいましたので、詳しい説明ができるのです。

こういう音楽をヘッドフォンで聴くと、独特のいい音がしますが、頭の中がギターの音で満杯になってしまうような感じがします。それが好きな人はそれで結構なのですが、実はスピーカーから音を出して聴くと、目の前にホールのステージが浮かびます。

そのステージの中央に、ギターを抱えて弾く山下さんが見えてきます。そして、音はホールの座席で聴くような、美しい響きをともなって耳に届くのです。

優秀なオーディオ機器と、少し音に配慮した部屋があれば、このようにホールで聴く音楽が、まったく同じではありませんが、ほぼそれに近い“相似形”の音楽として聴けるのです。そして、ヘッドフォンと違って、頭の中全体にギターの音が鳴り響くという不自然なことは起こりません。適度な大きさの音像で、響き（間接音成分）をともなって、部屋の空間にギターの音が鳴るのです。



『鳥の歌～山下和仁ギター小品集』

日本クラウン CRCC-8

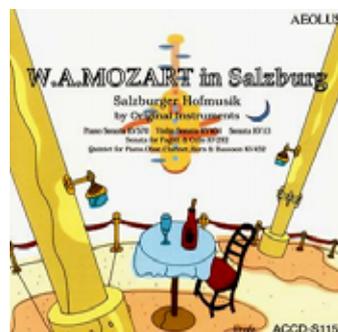
¥2,853（税込）

次に編成の少し大きな音楽を聴いてみます。モーツァルトのピアノと管楽器の五重奏曲(KV452)で、これはアイオロスの録音で私の制作したものです。

録音場所はザルツブルクの郊外、モントゼーの小さな音楽ホールです。楽器はピアノ、オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットで、すべて古楽器です。この編成ですと、個々の楽器の音がそれぞれ本物らしく聴こえることと、それらが合わさってできる楽器全体の響きも適切に再現しなくてはなりません。

これもヘッドフォンで聴くと、響きが平板でホールの座席で聴くような膨らみを感じられません。いわゆる臨場感に欠ける音です。これが、ここの会場のTADやJBLで再生すると、きっちりとホールの

サイズと楽器の形や大きさが感じられる響きの中に、個々楽器の音が浮かびます。これが、スピーカーで聴くオーディオの楽しさなのです。



『ザルツブルクのモーツァルト』

～古楽器によるモーツァルトの美しい世界～

ザルツブルガー・ホフムジーク』

アイオロス ACCD-S115

¥2,854(税込)

次はさらに編成の大きな音楽を聴いてみます。いくつか曲を用意したのですが、ここではその中でもっとも編成の大きいオーケストラに、ソプラノの圧倒的な熱唱も加わる作品で、ワーグナーの楽劇『トリスタンとイゾルデ』の最終曲「愛の死」です。

演奏はレナード・バーンスタイン指揮のバイエルン放送交響楽団、イゾルデはヒルデガルト・ベレンスです。この録音は81年でその翌年の発売時に入手して以来、20数年数え切れないくらい聴いているので、実際の録音には立ち会っていませんが、隅々まで知っている演奏です。しかも、かなりの種類のスピーカーで聴いてきました。

今回も会場に用意されていたほとんどのスピーカーで再生してみました。

この時の来客への私の殺し文句は、以下のようなものです。

「さあ、みなさん、最後に私の大好きな演奏を聴いていただきましょう。1年に最低2回ほど、悩みがあればそのつど(!?)このCDを大音量で再生します。わずか8分半ほどの音楽ですが、この音の波

の中に自分を溺れさせてしまうようにして聴くと、ああ、生きてきてよかった、と心底思いますし、大事な人のためなら死んでもかまわないと思いますし、些細な悩みは雲散霧消してしまいます。本当にオーディオ装置をもってよかったと思います。コンサートではこの演奏を好きなときに聴くというわけにはいきませんから。皆さんも今日のオーディオ機器の話は全部お忘れくださって結構ですが、スピーカーから音を出して、好きな音楽を好きな時に聴ける喜びと感動だけは、忘れないでください。では、至福の8分半をご一緒に」



『トリスタンとイゾルデ』全曲
バーンスタイン&バイエルン放送交響楽団
Cl Opera Philips

目を閉じれば、そこにパイロイトの舞台が浮かび、壮大な音のウネリの中に、イゾルデが立ち、天に腕をさし伸ばして歌う絶唱が、体の隅々にまで染み渡っていきます。優れたオーディオ機器なら、ここまで音楽をリアルに再現できるのか、と来客の大半の方々が感動を新たにされたのでした。

むすび

生の音楽を聴くことが大好きな方々が来客の大半であることは、9日のうち6日間、15時から行われたミニコンサートは、毎回ほぼ満席であったことから明らかです。そして残念なことに、そのミニコンサートが終わると立ち去る人が多いことでした。

機械で聴くよりも生の演奏のほうが魅力があるのは仕方ありません。しかし、コンサートの前にオーディオの楽しさをお話すると、残る人が増えます。これは、女性客、あるいは女性連れの方が多いのですが、高級オーディオ機器に関心がないのではなく、オーディオの“シキイ”が高いと感じていることを物語っています。オーディオの専門的な技術については、関心のある人はどこにでも出向きます。しかし、音楽ファンが大半を占めるイベントの場合は、なるべくオーディオの難しい話は抑えて、オーディオで音楽を聴くことの楽しさを訴えることに重点を置くべきだと感じました。

長年、音楽制作と同時に、オーディオ界にも近いところで仕事をしている立場から率直にいいますと、最近のオーディオの元気のなさ、ファン層の偏りが気になります。しかし、軽井沢で接した熱心なお客さんの反応に触れて、まだなすべきことがある、潜在的ファンは決して少なくない、と強く感じました。

筆者プロフィール

船木 文宏 (ふなき ふみひろ)

フリーの編集者、音楽プロデューサーを経て、雑誌「CDジャーナル」「サウンドステージ」を創刊。編集長を勤めるかたわら「アイオロス」レーベルを立ち上げる。

クラシック、ジャズを中心に話題作を制作。御喜美江子「アコーディオン・バッハ」で97年度に音楽之友社の日本レコードアカデミー賞を受賞。最近では5チャンネルのクラシック録音をパイオニアとの協力で製作している。

xrcd 初の SHM-CD エディションについて

ビクタークリエイティブメディア(株) マスタリングセンター

小川 義三 杉本 一家

はじめに

軽井沢オーディオサロンにおいて、当社が手がけるXRCDとSHM-CDをご試聴いただきましたが、トスカニーニが1949年に指揮したレスピーギの交響詩「ローマの松」がxrcd24で楽音が鮮明に蘇った演奏に感動したとのコメントもいただきました。



JM-M24XR01

レスピーギ：交響詩

「ローマの松」他

指揮：トスカニーニ

NBC 交響楽団

その折にもご案内した、高音質のXRCDとCD素材として脚光を浴びるSHM-CDとが融合した高音質CDが誕生致しました。

XRCD マスタリング・エンジニア 杉本一家セレクションによる全20タイトルを8月より限定生産で発売いたしました。本稿では、この新シリーズについてのご紹介をいたします。

1. 新エディションの紹介

1999年の第1回発売以来、その徹底した音質管理による「究極のリマスタリングCD」として日本国内のみならず海外でも高く評価されている、ビクタークリエイティブメディア・プロデュースによるRCAレッド・シールXRCDシリーズです。

ミュンシュ、ライナー、ハイフェッツ、ルービンシュタインをはじめとする20世紀にその名を残すRCAアーティストによる歴史的な名盤を続々と発売してきていますが、2009年に発売10周年をむかえるにあたり、「究極の高音質CD素材」として注目を浴びているSHM-CD仕様にて、厳選された20タイトルを発売いたします。



小川さん



杉本さん

20タイトルのセレクションは、第1回発売以来、XRCDシリーズ・プロデューサーとして、RCA音源のXRCD化の原動力となっている、ビクタークリエイティブメディア・エンジニアの杉本一家が担当。アナログLPのカッティング・エンジニア、そして今ではクラシックをはじめとする幅広いジャンルのマスタリング・エンジニアおよびレコーディング・エンジニアとしての豊富な経験と感受性の鋭いその耳によって選びぬかれた20タイトルです。

8月29日発売の3タイトルを皮切りに、毎月2~3タイトル発売予定。累計20タイトルです。

生産限定盤となります。

豪華デジパック仕様+透明プラスチックケース封入による、永久保存パッケージです。

ジャケットには初出LP盤のジャケット・デザインを使用しています。

価格は各税込み3,800円(税抜き3,619円)

2. 技術の特徴

(1) xrcdの特徴

xrcd はマスタリングからマニファクチャリングの工程までを、初めてハイビットで通して作成しました。

全てのデバイスをカスタマイズして、電源、ケーブルなども厳選しています。

xrcd は人間がすべての工程を一貫したクオリティ・コントロールにより実現した高品位 CD です。詳しくは xrcd ホームページ <http://www.xrcd.com> をご覧ください。



(2) SHM-CD (Super High Material CD) の特徴

通常の CD とは別種の液晶パネル用ポリカーボネート樹脂を、CD 透明基盤に使用することにより素材の透明性をアップ、マスタークオリティに限りなく近づいた高音質 CD*です。

液晶パネル素材を活用し、ポリカ - ボネイト樹脂基板の透明性を向上しました。

高流動性、高転写性の素材で CD のピットが正確にかつ精密に形成されます。

信号特性(複屈折、ジッター)が優れています。

詳しくは、[添付資料](#) と、次の SHM-CD ホームページをご覧ください。 <http://www.shm-cd.jp>



(注記)

*高音質とは、マスターに対する高忠実再生の意味で、音質に関する評価は再生環境等により異なります。

*SHM 及び、SHM-CD ロゴは日本ビクター(株)とユニバーサル ミュージック(株)の登録商標です。

3. シリーズの内容

2008 年 8 月より、xrcd+SHM-CD エディシ

ョン・シリーズとして、限定生産で発売致します。

SHM-CD エディション第 1 弾は 8 月 29 日発売、ベルリオーズ「幻想交響曲」(JM-CXR0001S)、サン=サーンス「交響曲第 3 番オルガン」(JM-CXR0002S)、ベートーヴェン「交響曲第 7 番他」(JM-CXR0006S)の 3 タイトルです。

以降の発売計画は[添付資料](#) をご覧ください。



(JM-CXR0001S)
ベルリオーズ
「幻想交響曲」



(JM-CXR0002S)
サン=サーンス
「交響曲第 3 番オルガン」



(JM-CXR0006S)
ベートーヴェン
「交響曲第 7 番・他」

おわりに

従来の XRCd でも十二分に聴き応えのあった音に、さらに磨きかけられ、20bit 原盤でありながら 24bit XRCd の音質に肉迫する勢いで、また新しい感動と出会えたことにマスタリング・エンジニアとして感謝しています。

筆者プロフィール

小川 義三(おがわ よしぞう)

ビクタークリエイティブメディア(株)取締役マスタリングセンター長。長年のカッティングシステム開発の経験を活かし、1995 年にマスタリングセンターを立上げ、1999 年以降 xrcd 制作に取組む。

杉本 一家(すぎもと かずいえ)

ビクタークリエイティブメディア(株)マスタリングセンター マスタリングエンジニア/レコーディングエンジニア。アナログ及びデジタルで広いジャンルの音楽制作を担当するこの道 30 年のベテランエンジニア。

軽井沢オーディオサロンで演奏した SHM-CD 作品

ユニバーサル ミュージック(株)
斉藤 嘉久

はじめに

この度は軽井沢オーディオサロンにお招きいただき、まことにありがとうございました。素敵な環境の中、素晴らしい機材で弊社の商品を皆様に聴いていただくことができ、とても光栄に存じました。

今回私がご紹介したのは、弊社ユニバーサル ミュージックと日本ビクター株式会社が共同開発した「SHM-CD」という新素材 CD です。



斉藤さん

SHM-CD

正式な名称は、「Super High Material CD」、直訳すると「非常に優れた材質の CD」になります。

一体どこが優れているのかと申しますと、CD の盤を形成しているポリカーボネート樹脂です。今回 SHM-CD では、従来の CD で使用しているものよりも透明性の高い液晶パネル用ポリカーボネート樹脂を使用しています。そのため、CD の中に埋め込まれた信号をより正確に読み取ることができ、マスター・クオリティに近い音が再現できるのです。

しかも、この SHM-CD の画期的なところは、従来の CD と同じく全ての CD プレーヤーで再生可能という点です。こうした利点により、弊社では昨年後半からロック、ポップス、ジャズ、クラシックな

ど、さまざまなジャンルの名盤を SHM-CD で再発売しておりますが、おかげさまでたいへん好評をいただいております。

リヴァーサイド・レーベル盤

今回は、弊社が発売しているジャズの名門レーベルの作品をご紹介しました。

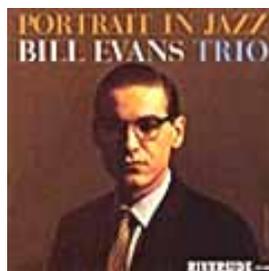
まずは、モダンジャズ三大レーベルのひとつであるリヴァーサイドの名盤です。

弊社では、今年 8 月に同レーベルの創立 55 周年を記念して【キープニュース・コレクション】と題する名盤復刻シリーズを 20 タイトル発売しました。

これは、レーベル創設者のオリン・キープニュースが自ら監修を手掛けたジャズ・ファン注目のシリーズで、いずれも最新の 24 ビット・デジタル・リマスタリングが施されています。日本盤では、これを SHM-CD 仕様で発売しました。

今回はどの作品も、まず従来の CD を頭 1 分ほど聴いていただき、その後で SHM-CD をフル尺で演奏しました。

1. ビル・エヴァンス『ポートレート・イン・ジャズ』



UCCO-9481

この作品では、エヴァンスのピアノが SHM-CD ではよりナチュラルに瑞々しさを増した音で再現されるのがお分かりいただけたかと思います。またバラードにおけるピアノの残響音の美しさも特筆すべきものでした。

2. セロニアス・モンク『ブリリアント・コーナーズ』



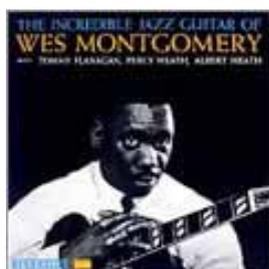
UCCO-9483

この作品では、<立体感のある音像>という特長を持つ SHM-CD が、モノラル録音ではどう再現されるのか、に注目して聴いていただきました。結果は、「これが最も従来の CD との差が歴然としていた」とのご感想を頂戴するほど、驚きの音質向上度でした。

3. キャノンボール・アダレイ・クインテット
『イン・サンフランシスコ』

UCCO-9484

次に、ライブ録音では SHM-CD はどのような効果を示すのでしょうか。結果は、まるで自分がライブ会場の座席に座って、目の前で演奏を聴いているような生々しい臨場感が再現されていました。これも SHM-CD の大きな効果のひとつです。

4. ウェス・モンゴメリー
『インクレディブル・ジャズ・ギター』

UCCO-9485

二作品つづけて管楽器中心の演奏でしたが、今度

は弦楽器(ギター)の録音を聴いていただきました。

SHM-CD では、従来の CD よりもふくよかなトーンになり、さらに弦を爪弾く微妙な指のニュアンスまでもが絶妙に再現されていました。

5. チェット・ベイカー『チェット』



UCCO-9488

激しい演奏が続いたので、リヴァーサイドの最後はトランペットの詩人による、優しいバラード演奏を聴いていただきました。

ECM レーベル盤

つづいて、ドイツが世界に誇る ECM レーベルの名盤をご紹介します。

ECM は音質にたいへんこだわりを持ったレーベルで、その「クリスタル・サウンド」と形容される音質は、ジャズ・ファンの間ではたいへん有名です。

弊社では、来年のレーベル創立 40 周年に先駆け、今年 9 月より同レーベルの名盤を SHM-CD で 70 タイトル順次発売します。今回は、その中から 3 作品を試聴していただきました。

1. キース・ジャレット・トリオ
『スタンダードズ Vol. 1』

UCCE-9124

1950 年代の録音だった先ほどまでのリヴァーサイド作品とは打って変わって、80 年代のクリアな録

音ですが、ここでも SHM-CD の立体的な音像効果は抜群に発揮されていました。

ピアノ/ベース/ドラムのスリリングな掛け合いも、より臨場感を増して再現されていたかと思いません。

2. チック・コリア

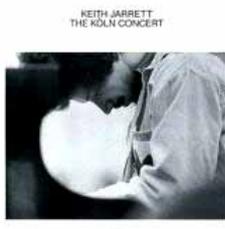
『リターン・トゥ・フォーエヴァー』



UCCE-9121

次に、エレクトリック・ピアノなどの電気楽器を使った録音の音色は SHM-CD でどう再現されるのか、を聴いていただきました。結果は、アコースティック楽器の録音同様の効果があることをお分かりいただけたかと思いません。

3. キース・ジャレット『ザ・ケルン・コンサート』



UCCE-9122

最後に、キース・ジャレットのソロ・ピアノによる名盤中の名盤を、時間の許す限り聴いていただきました。SHM-CD 効果による美しいピアノの響きに包まれた、至福のひとつときでした。

おわりに

今回ご来場いただいた皆様には、SHM-CD の素晴らしい音質を十分に実感いただけたのではないかと思います。

今後も弊社では SHM-CD のリリースを続々と行ってまいりますので、CD ショップに足を運ばれた際には、どうぞご注目いただければ幸いに存じます。

筆者プロフィール

斉藤 嘉久(さいとう よしひさ)

ユニバーサル クラシックス&ジャズ 制作編成部 第2グループ勤務。

早稲田大学卒業後、94年にポリグラム株式会社(現・ユニバーサル ミュージック)に入社し、96年秋よりジャズ編成担当に。現在は米国コンコードミュージックの日本窓口として同社の新作及びカタログ再発を中心に担当。

早稲田大学時代にはニューオーリンズジャズクラブに在籍しトランペットを演奏。